

令和3(2021)年度

日本特別活動学会 第8回 実践事例募集事業

推奨実践事例

事例番号 8-4

学級目標の達成に向けたチェックリストの作成と実践

(神奈川県)綾瀬市立綾北中学校

渡部 裕司(わたなべ ゆうじ)

実践テーマ	学級目標の達成に向けたチェックリストの作成と実践
実践区分 ○囲み	学級活動・ホームルーム活動 児童会・生徒会活動 クラブ活動 学校行事 その他(具体的に、)
実践事例の 背景、ねらい、 意義など	<p>学習指導要領によれば、学級は「学校生活において最も基礎的な集団」であり、「個々の生徒の学校生活の基盤づくりや教科における学習環境づくりに欠くことのできない重要な役割」を担っている。学級活動の内容の一つに「学級や学校における生活をよりよくするための課題を見だし、解決するために話し合い、合意形成を図り、実践すること」(1)ーア)がある。一方、現実には週に1回の学級活動の時間では、その他に取り扱わなければならない内容も非常に多いことから、実践校では、そうした話し合いに時間を十分にとることは難しい。学級経営においては、例えば「慣れ」などによってルールがおろそかになる時期が出てくるなど、さまざまな課題が表出する。学級の課題には例えば整理整頓ができていないなど言語化しやすいものもあれば、学級集団の雰囲気といった言語化しづらいものもあるが、可能ならばそうした課題について生徒に気づかせ、生徒たち自身の手で解決に向かわせたい。そうしたねらいから、年度当初に担任の願いや学級目標を実現するために必要なことを生徒が書き出し、投票の上で選ばれた項目から学級独自のチェックリストを作成し、毎月末に実践することとした。チェックリストについては集計を行ったうえで帰りのHRなどの短時間で結果を紹介し、学級の生活について振り返る機会を設けることとした。なお、チェックリストの項目については年度途中でも生徒の声によって項目数を増やすなどの改良を行った。</p> <p>教師や研究者の側から項目を示したアンケートから学級を考える事例は、田中博之が提唱する「学級力アンケート」などの先行実践があるが、本実践は学級目標と関連させて生徒たち自身が選んだ項目により、学級の生活上の課題について考える機会を設けていることに価値があると考えられる。</p>
実践の時期	平成・令和 3年4月～令和4年1月

【実践事例】（成果と課題を含む）

1. 学級目標とは

学級目標とは、「それぞれの学級において、児童生徒のみんなが目指す日々の生活の目標」（『新版現代学校教育大事典1（あーかつ）』、ぎょうせい、2002年、p.432）であり、日本全国の多くの学級で学級目標づくりが行われていると思われる。一方、相田崇晴（2003）が「動かない学級目標（掲示して終わり）から、動く学級目標（子どもたちの行動原理として位置づいたもの）になるように心掛けなければならない。」（『教育用語事典』、ミネルヴァ書房、p.83）と指摘しているように、学級目標をつくってそれで終わりになっている学級も多いと思われる。そこで「学級目標を達成するためのチェックリスト」を生徒の手により作成し、完成したチェックリストを毎月末に実施することで、学級の生活について振り返る機会を設ける実践を行った。この実践のねらいは3点あり、①学級の生活における課題を定期的に考える機会を創出すること、②学級の課題を可視化し生徒たち自身で改善に向かわせること、③学級目標を「動く学級目標」とすることである。なお、この実践は筆者が担任を務めた綾瀬市立綾北中学校の3年6組で行った。

2. 学級目標ができるまでの経緯

学級目標ができるまでの経緯は、以下の通りである。紙幅の都合があるため、箇条書きで簡潔に示す。

<学級開き1日目（4月5日）>

- ・「担任の願い」として、みんなで「居心地の良い一流のクラス」をつくり、卒業式の日に6組でよかったと言ええるようなクラスにしてほしい、という願いを生徒に語った。
- ・学級目標の設定への足がかりとして「居心地のよい一流のクラスに大切なこと」、「こんなことがあると一流ではない」ことを用紙に記入させた。なお、記入されたものは担任で整理した。

<学級開き2日目（4月6日）>

- ・1日目の生徒の記述をまとめたものを配付し、各自で、今年個人的にがんばりたいこと、クラス全体で達成したいことを考えさせた。そのうえで、4～5人班を構成して、班ごとにクラス全体で達成したいことのベスト3を話し合った。各班の話し合った内容はホワイトボードに記入して全体で共有した。

<学級開き3日目（4月7日）>

- ・2日目の各班のホワイトボードの内容を印刷したプリントを配付し、学級目標案を家庭で各自が考えるように指示した。（この日は、GIGA スクール構想によるタブレット端末の配付と初期設定、修学旅行の班を決める必要に迫られるなどの事情があり、学級目標を決めるための話合いの時間が取れなかった）

<学級開き4日目（4月8日）>

- ・各自が考えてきた学級目標について班で話し合い、各班1～2つの候補にしぼってホワイトボードに記入し、全体で共有した。さらに全体で議論を重ねた結果、学級目標が決まった。

このような経緯で決定された学級目標は、「千笑懸命～笑い積もれば幸となる」である。もとは「千笑懸命」と「笑い積もれば幸となる」は別の班から提案され、「千笑懸命」には別のサブタイトルが付いていたが、議論の過程でこの案となった。「千笑懸命」の由来は、一つのことではなく、体育祭をはじめとした行事や受験勉強など、あらゆることに対して一生懸命に取り組みたいことから「一」の文字を「千」とし、さらに「このクラスで良かったとみんなが思えるクラス」や「イベントなどを全力で楽しむ」、「担任の先生がよくダジャレを言う」、「クラス全体が明るい雰囲気になりたい」などの理由から「生」を「笑」としたとのことであった。「笑い積もれば幸となる」は、「塵も積もれば山となる」ということわざから来ているが、文字通り笑顔あふれるクラスとし、みんなが幸せに過ごすことができるようにしたいという思いが込められている。

3. 学級目標を具現化するチェックリストの作成（4月中旬～下旬）

学級目標の完成後、学級目標を達成するためのチェックリストを作成することを生徒に提案し、賛同を得た。そこで、「どんなことが出来たら、学級目標や担任の願いは達成なのか」について、用紙を配付して案を一人いくつでも記入させた。

集まった案については、類似のものを教員の側であらかじめ整理したうえで、生徒に示した。チェックリストの候補となる項目は32に整理された。項目の一覧をA0サイズの感熱紙に印刷して掲示し、緑のシールを一人5枚配り、重要だと思う項目にシールを貼る形で投票を行った。その結果、投票数の多かったものをチェックリストの項目として採用することとした。なお、本来であれば、この活動は学級活動の時間を用いたいところではあるが、時間の確保が難しかったため、事前に項目を知らせておき、帰りのHRを活用して投票を行うこととした。選ばれた項目は「暴力やいじめがない」「私たちみんなが笑顔である」「話を聞くべき場面での話をしっかり聞くことができるクラスである」など11の項目である。なお、年度途中で「チャイム着席についての項目を増やすべきではないか」という声があったため、「チャイム着席ができるクラスである」という項目を追加した。

4. チェックリストの実施と分析（4月～1月の毎月末）

こうして完成させたチェックリストは、月末の帰りのHRなどで、毎回5分ほどの時間をとり実施した。チェックリストの各項目は、一人につき10点満点とした。40名生徒が在籍しているため、400点満点である（欠席生徒分は、全体の平均値を算入することとした）。チェックリストの実施に当たっては、マークシート方式を用いることで、実施後の教員の集計の手間を最大限軽減した（回答用紙は資料1）。最後に良い点、改善すべき点、チェックリストの判断理由を自由記述で問うているが、そうした自由記述の集計を含めても、集計にかかる時間は30分程度で実施することができた。

集計の結果は、資料2のように前月の結果と当月の結果をレーダーチャートで示し、教室後方に掲示した。また、集計結果には、生徒の自由記述の内容や、クラスで取り組む「チャイム前給食」（4校時の授業終了から10分後に着席を促すチャイムが鳴るが、そのチャイムまでに給食の配膳を終えて食べ始めること）、「授業評価オールA」（毎授業後に日直が担当教員に授業の評価をA・B・Cの3段階で聞いて記入するが、その評価がすべてAだった日のこと）、「チャイム着席クリア」（学年全体でチャイムが鳴る前に着席できなかった人数を記録する活動に取り組んでおり、チャイムが鳴る前に着席できなかった人数が1日を通してゼロだった日のこと）、「×の人数/時間数」（チャイム着席に1時間あたりの失敗した人数）についても表記することとした。

5. チェックリストの結果を受けての話し合い

チェックリストの結果は、資料2の形にまとめ、教室後方に掲示したほか、毎月行う席替えの結果をプリントした裏面に印刷して配付するなどの方法で共有を図った。本来ならば、学級活動の時間に学級会を開催してクラスの生活をふり返ることができることが理想ではあるが、今年度はそのような時間を十分に取ることはできなかった。実践校においてそうした時間を取るための障壁となったことを3つ挙げる。1つめは、実践校の学級活動では、よりよい人間関係の形成に力を入れており、週に1回の学級活動の時間に定期的に学級会を開催する文化はないことである。その背景として、生徒が4つの小学校から進学してくることや、外国につながる生徒が非常に多く在籍していることがある。2つめは、3年生でこの実践を行ったため、学級活動の時間の多くが進路指導にかかわる時間として割く必要があったことがある。3つめは、学級活動の時間の内容は原則として学年で統一して行うこととなっており、クラス独自の活動へ時間が確保しにくいことがある。ただし、今年度実践を行ったクラスの生徒たちは落ち着いて生活を送っており、チェックリストの数値は、一部の項目を除いて大きく落ち込むことはなく、学級活動の時間を1時間使って話し合いを行うべきだと学級担任が考えるほど差し迫った問題はなかったことを付記しておく。

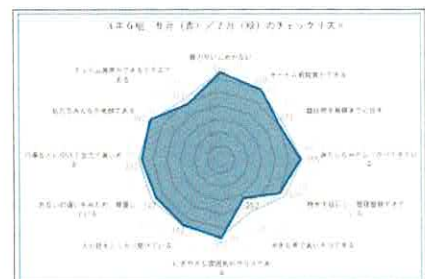
資料3に、チェックリストの11項目のうち、年間を通して安定した推移であった「いじめや暴力がない」の項目と、月により点数の落ち込みがみられた「大きな声であいさつができるクラスである」「チャイム着席ができるクラスである」の項目、チェックリストへの回答の妥当性を検証するため「1時間当たりのチャイム着席ができなかった人数」について1月までの変遷を示す。

項目		4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月
チェック リストの 結果	暴力やいじめがない	358.9	381.2	376.5	383.0	380.0	382.9	387.4	374.1	377.1
	大きな声であいさつができる	272.9	235.3	205.9	295.8	251.8	284.6	281.1	301.2	294.3
	チャイム着席ができるクラスである				330.9	311.8	301.7	299.4	331.8	327.1
チャイム着席失敗人数（人/1時間）					0.21	0.66	0.52	1.28	0.25	0.24

資料3 チェックリスト項目（一部抜粋）の月別変化



資料1 チェックリスト用紙



<よー声>
みんな優しい人だと思ふ/チャイム前給食ができなかった日でも他のクラスよりはやく食べられているからいいと思ふ/にきやか

<改善点>
あいさつをしっかりする/いつもあいさつの声が小さいと思ふ/あいさつを自分をふくめてちゃんとしっかりしたらいいと思ふ

	9月	10月	11月
チャイム着席率	11/20(55%)	12/12(100%)	13/22(59%)
授業評価オールA	18/18(100%)	10/17(59%)	10/17(59%)
チャイム前給食	8/17(47%)	6/11(55%)	4/17(24%)
1人1人 評価数	58人/88時間 (1時間につき0.65人)	1人/15時間	47人/69時間

資料2 チェックリストの集計結果（9月）

「暴力やいじめがない」の項目は、一年間安定して高い値を推移していた。ここで取り上げていない他の項目も、同様の推移であった。一方、「大きな声であいさつができるクラスである」については、はじめからさほど高い数値ではなかったが、6月に大きな落ち込みがみられる。担任としても、授業のはじめと終わりのあいさつの声がだんだんと小さくなってきていると気にかけていたところであり、担任から簡単な声掛けはして改善されたこともあったものの、しばらく経つとまた声が小さくなっているような状況があった。そのため、6月のチェックリストの結果を示す際に、どうすればこの項目を改善することができるのか、帰りのHRの時間を使って話し合い活動を実施した。どうしたらよいか考えて意見を求めた結果、「一人ひとりが小さくても声を出す」「意識することが大切だと思う」「あいさつの練習をする」などの意見が出た。実際に意識をしてあいさつの練習をしてみると、明らかに改善がみられた。この話し合いの後「俺は声が大きい方だから、しっかりとした声であいさつをし続ける」と言い、卒業まで有言実行した生徒もいた。「チャイム着席ができるクラスである」については、11月に落ち込みがみられるが、事実として「チャイム着席失敗人数(人/1時間)」も増加している。サンプル数は少ないが、参考までに、この2つの項目についてピアソンの積率相関係数(r)および無相関検定を行ったところ、 $r=-0.835$ ($p<.05$) であり、負の相関がみられた。生徒はチェックリストの数値の変化と実態には相関がみられることから、生徒はチェックリストに真摯な姿勢で取り組んでいると考えられる。

6. チェックリスト実践に対する生徒の評価(2月中旬)

毎月末にチェックリストを行った3年6組の生徒を対象として、資料4の5つの質問項目について、Microsoft Formsを用いて4件法で答える選択式の設問と、自由記述式の設問からなるアンケートを行った。表4は、結果を公表することに承諾が得られた27名の生徒の回答をまとめたものである。

	チェックリストに記入する場面は、自分の生活を振り返るきっかけになった。	チェックリストに記入する場面は、クラスのことを考えるきっかけになった。	チェックリストの結果を見ることは、自分の生活を振り返るきっかけになった。	チェックリストの結果を見ることは、クラスのことを考えるきっかけになった。	クラスで作ったチェックリストに継続して取り組むことは、よいクラスをつくることにつながると思う。
とてもあてはまる	8 (29.63%)	10 (37.04%)	8 (29.63%)	10 (37.04%)	13 (48.15%)
ややあてはまる	12 (44.44%)	12 (44.44%)	11 (40.74%)	11 (40.74%)	10 (37.04%)
ややあてはまらない	7 (25.93%)	5 (18.52%)	8 (29.63%)	6 (22.22%)	3 (11.11%)
全くあてはまらない	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (3.70%)

資料4 チェックリストについての生徒アンケートの回答

チェックリストの集計結果を受けての話し合い活動は十分に行えたわけではなかったが、どの項目についても、生徒は肯定的に評価していた。このことから、チェックリストを記入するという行為自体が、自分の生活やクラスのことを考える機会として機能しているのではないかと考えられる。なお、自由記述式の回答の一部を紹介すると、チェックリストを行うことで「何ができていないかを可視化できるから」良いという回答がある一方、「結果を見て、改善しようとする人が少ないように感じられたから(自分も含めて)」という回答もあり、結果を受けて改善に向けた話し合い活動の必要性を感じさせられた。

7. 成果と課題

本実践の成果は、大きく3つある。1つめは、学級目標や担任の願いを意識するために、生徒が提案した項目によって作り上げたチェックリストを毎月実施することで、学級目標を「動く学級目標」として機能させることができたことである。チェックリストで点数が低かった項目については、短時間ではあるが話し合う機会を設けることで、生徒たち自身でその改善に向けて考えさせることができた。2つめは、チェックリストを行うことで、例えば「私たちみんなが笑顔である」という項目のように、なかなか言語化しづらい雰囲気についても、生徒による数値評価でクラスの状態を表すことができたことである。3つめは、チェックリストを行うことによって、定期的に自分自身のことや学級のことを振り返るきっかけとすることができたことである。なお、チェックリストの項目の生徒の評価は、教師の見立てやチャイム着席失敗人数などの数値の変化と概ね一致しており、生徒は自らの手で作成したチェックリストに真摯な姿勢で向き合っていることが示唆される。なお、この実践にかかる時間として、生徒がチェックリストに取り組む時間が1か月に1回5分程度、教員側で行う分析は、生徒の回答にマークシートを活用したため、30分程度の時間で行うことができ、さほど負担感なく取り組めることも付記しておく。タブレット端末を活用すれば、回答の分析にかかる時間をさらに短縮することも可能である。

本実践の課題としては、チェックリストを実施して分析したあとの扱いである。本校の場合、前述の通り週1時間の学級活動で取り扱うべき内容が多く、十分に議論をする機会を持つことが難しい。ただし、本実践でも行ったように、気になる項目が1つか2つ程度であれば、帰りのHRなどの短い時間で話し合いの時間を持ち、改善につなげることができると考えられる。チェックリストを実施したのち、その結果を学級全体で振り返り、次につなげていこうという時間を確保することで、さらにチェックリスト実践を有効にすることができると考えられる。